

## 八ヶ岳（編笠山、西岳）

広大な裾野を持ち、起伏に富んだ峰々の連なる八ヶ岳山系は、見て美しく、登って楽しい山である。山系のほぼ中央にある夏沢（なつざわ）峠を境にして南八ヶ岳と北八ヶ岳に分けられる。南八ヶ岳は長野県と山梨県にまたがる広い裾野をもつ編笠山（あみがさやま）を最南端とする。編笠山から険しい山容の権現岳（ごんげんだけ）を経て大きく落ち込むキレットを通過し主峰赤岳（2,899m）に至る。赤岳（あかだけ）を中心に、阿弥陀岳（あみだだけ）、横岳（よこだけ）そして硫黄岳（いおうだけ）へと、それぞれ荒々しい岩肌をみせる男性的な山々が連なっている。赤岳周辺には岩場が多く、クライマーを楽しませてくれる。また岩陰にコマクサやウルップソウ、ミヤマダイコンソウ、イワウメなど可憐な高山植物が咲き乱れて登山者をなぐさめてくれる。

北八ヶ岳は、夏沢峠から箕冠山（みかぶりやま）、天狗岳（てんぐだけ）を登り、中山峠、麦草（むぎくさ）峠を経て縞枯山（しまがれやま）、北横岳、蓼科山（たてしなやま）へと続く。樹海の中に澄み切った水をたたえる小さな湖が点在するなど、南の男性的な山容に対して、優しく静かな女性的な味わいをただよわせている。

八ヶ岳連峰は、北端の蓼科山（2,530m）から南端の編笠山（2,524m）まで 21Km にわたって全体として一つの火山列を形成している。温泉にも恵まれ、泉質もさまざまで、高温あり、低温あり、鉱泉や温泉の数は三十余にもおよび、登山者の疲れをいやし、くつろいで山を語るには絶好の場所となっている。

八ヶ岳連峰は積雪が少ないので、大規模な湿性のお花畑は発達していないが、夏期気温の上昇が著しく、降水量が多いことからフロラ（植物相）は大変豊かで、白馬岳に次ぐ高山植物の宝庫だといわれている。八ヶ岳の名を冠した植物はヤツガタケシノブ、ヤツガタケアザミなど 9 種ある。八ヶ岳の最南端にある西岳（にしだけ 2,398m）は他の山に比べて標高も低くフロラもさして豊かではないが八ヶ岳のみに自生するヤツガタケトウヒと長野県の特産種ヒメマツハダなどを産することは、特筆すべきことである。

5 月には「春の女神」といわれているヒメギフチョウの舞うのも見られるが、マニアの乱獲、食草の持ち去りなどにより著しく生息数が減っている。

山麓の裾野にかけて生息する鳥類は、その種数において北アルプスをしのぐ。かつてライチョウも生息していたことが記録されているが、昭和の初めには絶滅したとされる。

八ヶ岳の高山帯に生息する動物の代表格はオコジョ（イタチ科）である。ハイマツ帯や岩場から顔を出したオコジョは、人なつっこい目で登山者をじっと見つめたり、岩から岩へと身軽に跳んでみせたりもする。このかわいらしいオコジョも、ノネズミを襲ったり、ノウサギの首にかみついてひき倒すというどう猛さをもっており、高山帯のギャングともいえる。冬には尾端の黒毛だけ残して全身純白の毛に変身する。ハイマツ帯にはオコジョに捕食されることの多いトガリネズミなど小動物が生息している。トガリネズミは八ヶ岳に生息する珍獣で、世界最小の哺乳類である。体重 4~5g ぐらい。鼻がとがり、形はネズミに似ているが、モグラに近い動物である。

編笠山は編笠をふせたような形によって名付けられた。円錐形の整った形をした山で、編笠山溶岩によってできた溶岩丘である。山頂付近は特に急傾斜を示し、溶岩の粘性が高かったことを示している。そして全体にわたって噴火当時の原形を保っている。山頂は大きな岩がゴロゴロしている坊主頭で、そのまわりをハイマツがとり巻いている。この山は西岳などととも、権現岳を奥の院とする前山であった。山腹にも観音平（かんのんだいら）、延命水、金命水など修験道に因む地名が多い。この山の北鞍部にある青年小屋に腰をすえてゆっくりと眺望を楽しみたい。

西岳は権現岳の西方にそびえ、山体は長野県に属するため八ヶ岳では長野県最南端の山ということになる。八ヶ岳連峰南端に位置しながら西岳というのは不思議だが、立場（たつば）川以南の山々を修験道場とした人々が、その山々の中で西の端にある山という意味で西岳と呼んだのがはじまりである。阿弥陀岳とか権現岳といった神仏そのものの名ではないが、これも修験道、山岳信仰ゆかりの山名の一つと考えてよい。中腹に「信玄のかくれ岩」といわれる岩穴があり、周囲に湧水がないのに、ここだけ清冽な清水が湧き出している。岩穴は広くはないが十人位ならば雨露をしのぐことができる。ほの暗い中に入ると足元に大きな盤石があり、中央が大きく凹んでいる。ノミで削った跡があり、石製の水盤であることがわかる。信玄ではなく修験者達が湧水をここに導いて使ったのであろう。この山域には未だ知られぬ山岳信仰遺跡が埋もれているようである。

編笠山、西岳の南西山麓は、日本有数の縄文時代の住居遺跡群集地として有名である。この一帯は縄文中期文化の豪華な花が咲き誇ったところである。

山麓を通る現在の「鉢巻道路」は、もともと武田信玄が越後攻略のために拓いた「上の棒道（ぼうみち）」という軍用道路あとを利用した道である。棒道とは「棒のようにまっすぐな道」という意味で、上、中、下の3本があったと言われる。この山麓部も戦国時代には、つわものどもの世界であった。

信濃毎日新聞社（昭和58年刊）『信州山岳百科Ⅱ』から抜粋（一部改変）